

太宰治「女の決闘」の先行テキスト およびそこから発展する問題について

栞原 丈和

はじめに

2019年に『小説を読むための、そして小説を書くための小説集』（ひつじ書房・以下『小説集』と略する）という小説アンソロジーを編集し、解説を付けて小説の読解や創作に関心のある学生や一般向けに出版した。五編の短編小説を全文収録し、それら一つ一つについて、どのように書かれ、どのように読者を導いているのか、またそこからどのような読解・創作の方法を取り出せるのかを解説し、さらにそれを実践するための課題を提示するという構成になっている。実際に学部1年生の読解・創作の実習で教科書として使ってきたのだが、その準備を続けているうちに解説を書いている時には見落としていた点に気づくことがあった。

さらに、その小さな発見が大学院の授業で教科書として用いた評論でなされている問題提起とかかわってきて、新たな研究のアイディアが導き出されたので、ここではそれについて報告したい。

「女の決闘」について

まず『小説集』で取り上げた小説について説明しよう。第三章では森鷗外が翻訳したドイツの作家ヘアバーツ・オイレンベルク Herbert Eulenberg

の小説「女の決闘 Ein Frauenzweikampf」(1910年、翻訳は1911年、以下オリジナルと呼ぶ)を、続く第四章ではそのパロディである太宰治「女の決闘」(1940年、以下パロディと呼ぶ)を取り上げている。第三章は登場人物が語り手になっていない、ナレーターが登場人物の間を移動して様々な視点から情報を伝えるいわゆる三人称の小説をどのように読解したらいいのか、さらにそこで語られずにいる〈空所〉を埋めることが新たな小説創作の契機になり得ることを解説している。第四章で取り上げた太宰治のパロディは、プロの小説家がどのように〈空所〉を埋めて新たな小説を生み出しているのかの実例ということになる。元々この小説は『月刊文章』という小説家志望の読者向けの雑誌に連載された、小説の形を取った小説創作入門と言えるものなので教材として非常に適切である。

オリジナルでは、決闘の当事者であるコンスタンチェという女性の視点になっている箇所が多く、もう一方の当事者である「女学生」については心理描写も無く、また決闘の原因となったコンスタンチェの夫については何の説明も無い。パロディはその二人について詳しく書き足すことでオリジナルとは全く別の小説を生み出しており、『小説集』ではパロディ「女の決闘」で夫についての情報がどのように補なわれているかを中心に解説した。小説家としてのキャラクターが付与された夫については芥川龍之介「地獄変」や菊池寛「藤十郎の恋」といった先行する小説との関係・批評性から説明したが、「女学生」の方については十分なアイデアが無く紙幅の関係もあってほとんど解説をしなかった。

しかし、最近になって「女学生」のキャラクターについて、太宰治による女性の登場人物を語り手とするいわゆる「女性一人称」「女性独白体」の小説との関係で説明ができそうだとすることに気がついた。『小説集』では先行する小説とそれを書き換えて新たに作り出される小説とのインターテクスチュアリティは一對一ということではなく、複数のテキストが関わることになる、ということも説明しているが、第四章では実例が十分に示されていないわけである。

たとえば、パロディには次の様な記述がある。

あくる日、二人の女は、陰鬱な灰色の空の下に小さく寄り添って歩いている。黙って並んで歩いている。女学生はさっきから、一言聞いてみたかった。あなたはあの人を愛しているの？ほんとうに愛しているの？けれども、相手の女は、まるで一匹のたくましい雌馬のように、鼻孔をひろげて、荒い息を吐き吐き、せっせと歩いて、それに追いつがる女学生を振払うように、ただ急ぎに急ぐのである。女学生は、女房のスカートの裾から露出する骨張った脚を見ながら、次第にむかむか嫌悪が生じる。「あさましい。理性を失った女性の姿は、どうしてこんなに動物の臭いがするのだろうか。汚い。下等だ。毛虫だ。助けまい。あの男を撃つより先に、やはりこの女と、私は憎しみをもって勝敗を決しよう。あの男が此所へ来ているか、どうか、私は知らない。見えないようだ。どうでもよい。いまは目の前の、このあさはかな、取乱した下等な雌馬だけが問題だ。」二人の女は黙ってせっせと歩いている。女学生がどんなに急いで歩いても、いつも女房の方が一足先に立って行く。遠くに見えている白樺の森が次第にゆるゆると近づいて来る。あの森が、約束の地点だ。⁽¹⁾

オリジナルには、女性二人が決闘場所に向かう途中で「女学生の方が何か言ったり、問うて見たりしたいのを堪えているかと思われる」というナレーターによる説明があるものの、女学生の心理は〈空所〉になっている。引用したパロディの記述は彼女が何を「言ったり、問うて見たりしたい」のかを補足してその〈空所〉を埋めた箇所になる。そして、それにとどまらずパロディによる補足は同じくオリジナルでは書かれていない「女学生」が決闘相手の「女房」に対して持っている感情にまで言及している。そして、ここで語られている女性嫌悪と呼ぶしかない記述は、「女の決闘」の少し前に書かれた太宰治の小説「女生徒」におけるそれと近いのではないか、というのが今回新たに気がついた点となる。

なお、男性の小説家が女性の語り手・登場人物に女性嫌悪の発言をさせるという構図についても考察中なのだが、それは一人の小説家個人の問題ではなく、他の小説家も含めた時代の問題としてとらえる必要があると考え、このノートではなく別の機会にあらためて論じることにしたい。

では、次にその「女生徒」の一節を引用しよう。

(略) バスの中で、いやな女のひとを見た。襟のよごれた着物を着て、もじゃもじゃの赤い髪を櫛一本に巻きつけている。手も足もきたない。それに男か女か、わからないような、むっとした赤黒い顔をしている。それに、ああ、胸がむかむかする。その女は、大きいおなかをしているのだ。ときどき、ひとりで、にやにや笑っている。雌鶏。こっそり、髪をつくり、ハリウッドなんかへ行く私だって、ちっとも、この女のひとと変らないのだ。

けさ、電車で隣り合せた厚化粧のおばさんをも思い出す。ああ、汚い、汚い。女は、いやだ。自分が女だけに、女の中にある不潔さが、よくわかって、歯ぎしりするほど、厭だ。金魚をいじったあとの、あのたまらない生臭さが、自分のからだ一ぱいにしみついているようで、洗っても、洗っても、落ちないようで、こうして一日一日、自分も雌の体臭を発散させるようになって行くのかと思えば、また、思い当ることもあるので、いっそこのまま、少女のままで死にたくなる。ふと、病気になりたく思う。うんと重い病気になって、汗を滝のように流して細く痩せたら、私も、すっきり清浄になれるかも知れない。生きている限りは、とてものがれられないことなのだろうか。しっかりした宗教の意味もわかりかけて来たような気がする。⁽²⁾

先程の「女の決闘」が「女学生」から「女房」への一方的な「嫌悪」であるのに対して、引用した「女生徒」では「女のひと」や「おばさん」に対する「いや」だという感情が同じ女性である自分自身へと向かうところが異なっている。しかし、「むかむか」という共通の表現、「動物の臭い」「生臭さ」「雌の体臭」といった嗅覚に関わる表現、「雌馬」「雌鶏」という対象を動物に擬える表現が共通している。同じ作者が女性に女性を嫌悪させている箇所であるし、発表時期も一年くらいしか離れていないわけなので、似ていても不思議は無いとも言えるのだが、ただ「女生徒」という小説の成立事情により、この話は別の形での展開が可能になる。

「女生徒」について

「女生徒」という小説が読者の女性から太宰治のところに送られてきた日記に基づいて書かれているということは、津島美智子夫人の回想によって以前からよく知られている⁽³⁾。その日記がどのようなものなのかは翻刻されたものが写真版と共に青森県近代文学館によって『有明淑の日記』として2000年に出版されて初めて明らかになった⁽⁴⁾。『有明淑の日記』によると日記は縦26センチメートル・横20センチメートルのB5よりも少し幅の広いノートを使って、1938年4月30日から8月8日までの三ヶ月余りの記録が90頁強の長さで記されている。この記述を取捨選択・順番を入れ替えて1日に編集し、冒頭の日覚めの場面と結末の就寝の場面を書き足したのが「女生徒」ということになる。

たとえば、先程引用した女性嫌悪にまつわる記述は日記の次の記述を書き直したものと考えられる。

今日も電車の中バスの中で、しわのある女の~~大~~が、厚化粧をして、髪を流行まきにしてゐるのを見た。顔は綺麗なのだけど、自分の老いた事を、懸命に~~か~~く~~て~~焦つてゐる事が、ぶつてやりたい程、厭だつた。それから練馬に降りて道~~に~~を歩るいている時、紙芝居を見てゐる女を見た。

汚れた着物を着て、モチヤ~~へ~~の汚れた髪を、櫛一本にまきつけてゐる。手も足もきたない。顔も、女か男かわからない様な顔をしてゐる。それに今、書いてゐても、胸がムカ~~へ~~する様な気がする。その女は大きいおなかをして、ニヤ~~へ~~笑つたりして紙芝居を見てゐるんだ。傘もさしていない黒~~い~~カビくさい女、バスの女も、紙芝居の女も同じ様に厭だ。同じ様に、年を取つてゐる事が厭だ。バスの女は教養もあり、趣味も~~あ~~り着物の趣味も悪くない。

良い家の奥さんらしいけど、紙芝居の女と少しも変らない所がある様な気がする。自分が女だけ [に]、女の人の美しさも~~わ~~かるけど敏感だし、中にある不潔さも知つてゐる。⁽⁵⁾

これは五月十九日の記述であるが、前の「女生徒」と比べてみると、よごれた着物、もじゃもじゃの髪、手も足もきたない、女か男かわからない、大きいおなかでにやにや笑っている、厚化粧、不潔さ、いやだ、といった共通している語彙（表記は変えられたりしているが）は確かにあるが、記述が挿入されたり、場面が変更されたり全体としてはかなり異なる文章になっているのがわかる。

日記の出版以後、「女生徒」について書かれた論文は基本的に元になった日記とそれを抜粋・再構成・加筆した小説とを比較するものになっている。冒頭でふれた大学院の授業で教科書として使用した評論である大塚英志『文学国語入門』も日記と小説とを比較し、太宰治によって日記の筆者有明淑の「私」は「姿を変えてしまった」と指摘している⁽⁶⁾。

『文学国語入門』は19世紀末の近代初めから21世紀初頭の現代までの日本の「文学」が「他者と社会の中での関わり方」について「一貫して行なってきた試行錯誤」を明らかにするのがテーマとなっている⁽⁷⁾。「他者と社会の中での関わり方」というのは、2022年度、すなわち今年4月から実施されている「高等学校学習指導要領」に繰り返し出て来る「言葉を通して他者や社会に関わろうする態度を養う」という「目標」から取ったものである⁽⁸⁾。タイトルに使われている「文学国語」という言葉自体、その「高等学校学習指導要領」で「論理国語」などと共に新たに設定された科目名から取っている。とはいえ、このタイトルが皮肉であるのは、「他者と社会の中での関わり方」を学ぶのが目標であるなら「新指導要領はいよいよ文学の出番だよ、と言っているのに等しいのです」とわざわざ傍点を打ってありえないことを強調しているのでもわかるだろう⁽⁹⁾。

本書の続く箇所では、「私」というフィクションを「一人称言文一致体の文学」として明治期に誕生させ、しかしそこで書かれた「私」は本当の「私」だと多くの「作者」が言い、「読者」も長い間、信じ込んできました、「近代の「文学」は「私」をつくり出し、そしてそれが「私」や「社会」といかに関わるかという問いに脇目も振らず邁進してきたわけではありません」、「一人称言文一致体」がつくり出した「私」は、世間知らずで独善的で承認欲求だけは強く自己愛に満ちています」と、近代の「文学」

に批判的に読み取れる言い回しが繰り返されている¹⁰⁾。そのような「文学」を通して「他者と社会の中での関わり方」を学ぶなどと提唱する「学習指導要領」作成に関わった人たちは何も考えていない、というのが先程の傍点にこめられた皮肉だと考えられる。

このように従来の近代日本文学史への批判的な観点に立つ『文学国語入門』を、さらに批判的に読み解き、また取り上げられた様々なテキストを実際に読んで意味づけに無理なところはないかなどを検証すべく、大学院の授業の教科書に選んだのだが、話をこのノートの文脈に戻すと、「世間知らずで独善的で承認欲求だけは強く自己愛に満ちて」いる「私」の一例として挙げられているのが太宰治「女生徒」の「私」なのである。その「私」は元の日記の筆者ではなく、あくまでも再構成された小説のものである。

『文学国語入門』で「女生徒」について主張していることをまとめると次のようになる。

1. 太宰治は「燈籠」という「女性一人称小説」を書いているが、後から書かれた「女生徒」に比べて「生き生きとしていない印象」である。
2. 「女生徒」が「生き生きとしている」のは女性の日記という「「下敷き」があるから」だ。
3. 日記冒頭の雑記帳を手に入れた喜びを書く記述には「「書く」ことで「私」が現れるような感覚」が書かれているのに「女生徒」ではそこは使われず、「文学の様式」に合わせた朝の目覚めの場面に置き換えられている。(以上第一章)
4. 「女生徒」では「私」を「特定の時代背景に位置付ける情報が」削られており、「いつの時代に生きる「私」か判然としない」。
5. 太宰治が削ったのは「固有名詞」と「戦争」で、後者に関わって「国家から思考の自由を奪われたくないと考える強固な「私」」が日記にはある。(以上第二章)

授業中のディスカッションでは四つ目と五つ目の主張について、「時代背景に位置付ける情報」は実際はいくらか残されている、非公表が前提の日

記と違って小説にする際に「戦争」についての記述が検閲で問題にされないかという配慮があったのではないか、という批判がなされた。ただ、一つ目と二つ目の「生き生きとしているか」どうか、については小説としての題材、それぞれの「私」の置かれた状況が違いすぎるため比較が難しいということになった。(なお、三つ目については基本的に納得ということになった)。

また、もし日記を「下敷き」にすることで「女生徒」の記述が「生き生き」したものになったのを認めたとして、以降の太宰治の「女性一人称小説」にもその影響が続いているのか、たとえば二ヶ月後に発表された「葉桜と魔笛」と比較するとどうなるのか、という疑問も提示された。影響があるとすれば、「女の決闘」における一人称に近い表現もその流れの中で捉えられる可能性がある。

「燈籠」について

「女生徒」以降の小説を話題にする前に、大塚英志が「生き生きとしない」としている「燈籠」(1937年)という小説について説明しておきたい。一つの小説は複数の文体で書かれていることもあり、単純に文章から受ける印象を説明することは実際は難しいということを示すためにである。「燈籠」は万引きをしたために家族以外の近所の人たちから白眼視されるように感じている女性が、万引きするまでの経緯を語るという設定となっている。まず冒頭を引用してみる。

言えは言うほど、人は私を信じて呉れません。逢うひと、逢うひと、みんな私を警戒いたします。ただ、なつかしく、顔を見たくて訪ねていっても、なにしに来たというような目つきでもって迎えて呉れます。たまらない思いでございます。

もう、どこへも行きたくなくなりました。すぐちかくのお湯屋へ行くのにも、きっと日暮をえらんでまいります。誰にも顔を見られたくないのです。ま夏のじぶんには、それでも、夕闇の中に私のゆかたが白く浮

んで、おそろしく目立つような気がして、死ぬるほど当惑いたしました。きのう、きょう、めっきり涼しくなって、そろそろセルの季節にはいりましたから、早速、黒地の単衣に着換えるつもりでございます。こんな身の上のままに秋も過ぎ、冬も過ぎ、春も過ぎ、またぞろ夏がやって来て、ふたたび白地のゆかたを着て歩かなければならないとしたなら、それは、あんまりのことでございます。せめて来年の夏までには、この朝顔の模様のゆかたを臆することなく着て歩ける身分になりたい、縁日の人ごみの中を薄化粧して歩いてみたい、そのときのよろこびを思うと、いまから、もう胸がときめきいたします。¹¹⁾

「女生徒」の文末が「～いる」「～だ」「～た」止めの常体であるのに対して、「～です」「～ます」「～ました」止めの敬体であるのがまず違うが、さらに句読点による区切りも「燈籠」の方が少ないという違いがある。確かに大塚英志の主張するように読者に与える印象は異なるだろう。ただ、万引きで捕まった「私」が交番で警官に対して発した言葉は冒頭とは違う文章で書かれている。

私を牢へいれては、いけません。私は悪くないのです。私は二十四になります。二十四年間、私は親孝行いたしました。父と母に、大事に大事に仕えて来ました。私は、何が悪いのです。私は、ひとさまから、うしろ指ひとつさされたことがございませぬ。水野さんは、立派なかたです。いまに、きっと、お偉くなるおかたなのです。それは、私に、わかって居ります。私は、あのおかたに恥をかかせたくなかったのです。お友達と海へ行く約束があったのです。人並の仕度をさせて、海へやろうと思ったんだ、それがなぜ悪いことなのです。私は、ばかです。ばかなだけけれど、それでも、私は立派に水野さんを仕立てごらんにいれます。あのおかたは、上品な生れの人なのです。他の人とは、ちがうのです。私は、どうなってもいいんだ、あのひとさえ、立派に世の中へ出られたら、それでもう、私はいいんだ、私には仕事があるのです。私を牢へいれては、いけません、私は二十四になるまで、何ひとつ悪いことをしな

かった。弱い両親を一生懸命いたわって来たんじゃないか。いやです、いやです、私を牢へいれては、いけません。私は牢へいられるわけではない。¹²⁾

どちらも敬体ではあるが句読点による文の区切り、品詞数を数えてみると異なる傾向を示している¹³⁾。冒頭部は481文字、後の引用は483文字と文字数が近くなるように文章を抜き出しているが、句点は11対22、読点は28対31となり、句読点によって後者の文章は前者よりも細かく区切られていることになる。また、品詞全体は253対287といくらか交番での発言の方が少し多いのだが、動詞は54対32、形容詞は8対12、名詞は49対49、代名詞8対23、連体詞・副詞合わせて14対7、助詞は83対87、助動詞は33対57というという差が生じている。大きな差がある品詞だけ取り上げると、冒頭の方が助動詞が少ないのは文の数が少ないことと関係しているし、文の数が少ないのに動詞の数が多いたのは、複文構成になっている箇所が多いからである。

ちなみに前に引用した「女生徒」から479文字抜き出したものでは、句点16、読点36、品詞全体255、動詞46、形容詞11、名詞55、代名詞4、連体詞と副詞17、助詞79、助動詞28と「燈籠」のどちらの部分とも異なる数字となっているが、文の区切りの頻度に関しては交番での発言の方に近くなっている。

このように一つの小説の中が同じ文体で一貫しているというわけではないので、「下敷き」があるから文体が変わっているとは言いきれないのである。この研究ノートでは、小説の一部分の、しかも句読点数・品詞数の単純な比較だけにとどめているが、語と語の関係性なども比較すればさらに文体の違いが明確にできるだろう。

「女性一人称」「女性独白体」について

太宰治の小説において女性登場人物が語り手になっているものは以前から特別な評価がなされてきた。煩雑になるのでここでは一例を挙げるにと

どめるが、2005年に刊行された『太宰治大事典』では「女性独白体」という項目が立っており、太宰治の小説全体の一割強にあたる十六編がそれに該当することが指摘されている¹⁴⁾。ただ、その文体の特質や先行作との関係などにふれられていないのは、まだ十分に検討が進んでいないことを示してもいる。

「女性一人称」「女性独白体」の小説を集めた短編集は、太宰治の生前にも『女性』（1942年）という題名で刊行され、さらに最近も同様の方針の文庫本が編集され、その内容紹介では「太宰がもっとも得意とする女性の告白体小説の手法」という説明がされていたりする¹⁵⁾。

有明淑の日記が太宰治の「女性一人称」小説の文体を変化させた可能性を検証するためには、「女生徒」の後に書かれた小説についても調査する必要がある。さらに「女の決闘」の前に書かれているとより適切なわけだが、その条件に当てはまるものとして「葉桜と魔笛」（1939年）がある。

この小説はこれまで紹介してきた小説とは異なり、「老夫人」が自身に「二十四の秋」に体験したことを回想し「物語る」という設定になっている。語り手の年齢設定が高いためか、一般的な敬体だけではなく「ございます」「ございました」という聞き手を配慮した表現があるため、また印象が異なっている。

桜が散って、このように葉桜のころになれば、私は、きっと思い出します。——と、その老夫人は物語る。——いまから三十五年まえ、父はその頃まだ存命中でございまして、私の一家、と言いましても、母はその七年まえ私が十三のときに、もう他界なされて、あとは、父と、私と妹と三人きりの家庭でございましたが、父は、私十八、妹十六のときに島根県の日本海に沿った人口二万余りの或るお城下まちに、中学校長として赴任して来て、恰好の借家もなかったので、町はずれの、もうすぐ山に近いところに一つ離れてぽつんと建って在るお寺の、離れ座敷、二部屋拝借して、そこに、ずっと、六年目に松江の中学校に転任になるまで、住んでいました。私が結婚致したのは、松江に来てからのことで、二十四の秋でございましてから、当時としてはずいぶん遅い結婚でござ

ざいました。早くから母に死なれ、父は頑固一徹の学者気質で、世俗のことには、とんと、うとく、私がいなくなれば、一家の切りまわしが、まるで駄目になることが、わかっていましたので、私も、それまでにくらも話があったのでございますが、家を捨ててまで、よそへお嫁に行く気が起らなかったのでございます。¹⁶⁾

地の文はこの文体で一貫しているが、「燈籠」と同様に登場人物が他の登場人物に語る言葉は違う文体で書き分けられている。

「姉さん、あの緑のリボンで結んであった手紙を見たのでしょうか？ あれは、ウソ。あたし、あんまり淋しいから、おととしの秋から、ひとりであんな手紙書いて、あたしに宛てて投函していたの。姉さん、ばかにしないでね。青春というものは、ずいぶん大事なもののよ。あたし、病気になってから、それが、はっきりわかって来たの。ひとりで、自分あての手紙なんか書いてるなんて、汚い。あさましい。ばかだ。あたしは、ほんとうに男のかたと、大胆に遊べば、よかった。あたしのからだを、しっかり抱いてもらいたかった。姉さん、あたしは今までいちども、恋人どころか、よその男のかたと話してみたこともなかった。姉さんだって、そうなのね。姉さん、あたしたち間違っていた。お懶巧すぎた。ああ、死ぬなんて、いやだ。あたしの手が、指先が、髪が、可哀そう。死ぬなんて、いやだ。いやだ。」¹⁷⁾

語り手の「老夫人」に彼女の妹が語った言葉であるが、「葉桜と魔笛」自体の地の文よりも「燈籠」の私が警官に語った言葉と近い印象を受ける。句読点や品詞の数についてはここでは省略するが、その印象がどのくらい正しいのかを検証することで、太宰治による「女性一人称」が特別な評価を受けている理由も明らかにできるのではないだろうか。

「一人称」について

ただ、注意しておかなければならないのは、「女性」の「一人称」であるということにどのくらいの特異性があるかである。たとえば、次の様な男性の語り手の「一人称」である小説と比べて文体上の違いがあるかということも考えなくてはならない。

私は、あの人の居所を知っています。すぐに御案内申します。ずたずたに切りさいなんで、殺して下さい。あの人は、私の師です。主です。けれども私と同じ年です。三十四であります。私は、あの人よりたった二月おそく生れただけなのです。たいした違いが無い筈だ。人と人との間に、そんなにひどい差別は無い筈だ。それなのに私はきょう迄あの人に、どれほど意地悪くこき使われて来たことか。どんなに嘲弄されて来たことか。ああ、もう、いやだ。堪えられるところ迄は、堪えて来たのだ。怒る時に怒らなければ、人間の甲斐がありません。私は今まであの人を、どんなにこっそり庇ってあげたか。誰も、ご存じ無いのです。あの人が自身だって、それに気がついていないのだ。いや、あの人は知っているのだ。ちゃんと知っています。知っているからこそ、尚更あの人は私を意地悪く軽蔑するのだ。あの人は傲慢だ。私から大きに世話を受けてるので、それがご自身に口惜しいのだ。あの人は、阿呆なくらいに自惚屋だ。私などから世話を受けている、ということ、何かご自身の、ひどい引目でもあるかのように思い込んでいなさるのです。¹⁸⁾

「あの人」イエスの側で過してきた男性がローマ人の役人に語るという設定を持つ「駆込み訴え」(1940年)の冒頭近くである。数字は省略するが句読点数・品詞数で言うと、同様に役人である警官に呼びかけている「燈籠」の「私」の発言と近い数字になっている。「女性」について用いられる役割語(「葉桜と魔笛」)の妹の発言における「なのよ」「なのね」の有無ということも関係するかもしれないが、言葉の構成からみると女性の語り手の小説と男性の語り手の小説とで大きな違いは無いのかもしれない。設定で女

性だと知らされているという先入観が「女性一人称」「女性独白体」を特別なものを感じさせてしまったということもあるのかもしれない。

今後の課題

以上をふまえて、太宰治の文体に関して今後作業し、検証しなければならないのは以下の点となる。

1. 「燈籠」と「女生徒」の計量的文体比較

「生き生き」としているか否かという印象論では無く、実際にどのように文体に差があるかを検証する。

2. 「女生徒」と「有明淑の日記」の計量的文体比較

「燈籠」と「女生徒」ではっきりと文体に差があった場合、それが「有明淑の日記」を「下敷き」にしたからなのか、どのくらい文体に共通性があるかを検証する。

3. 「燈籠」と「女生徒」と「葉桜と魔笛」の計量的文体比較

「女生徒」が「有明淑の日記」の文体の影響を受けていたとして、その影響は「葉桜と魔笛」を一例とする他の小説に及んでいるのか。また、結果として影響を受ける前の「燈籠」とどのくらい違っているのか。

4. 女性一人称の小説と男性一人称の小説「駆込み訴え」との計量的文体比較

太宰治の女性が語り手の小説は独特な文体を持つと評価されてきたが、男性が語り手のものと比較して本当に文体が異なると言えるのか。

実際の計量的文体比較の方法については、たとえば孫吳「文学作品の代筆問題」⁹⁹が参考になると考えている。この中では代筆が疑われている川端康成の作品について、従来の「専門家の内省に基づいて行われていた」「著者識別」ではなく、「統計解析を用いて」代筆の実際を明らかにしようとした論である。川端康成の作品を分析対象として、「代筆疑惑作品」とそう見なされていない作品との「文体特徴量」の差を明らかにした上で、「代筆疑惑

作品」を代筆者と見なされている中里恒子自身の作品とも比較し、その中には二人の作家が共同執筆したものと推定している。「有明淑の日記」と「女生徒」の関係は代筆とは異なるが、二人の著者の書いた文章が入り混じっているという意味では共同執筆に近いと言える。

「文学作品の代筆問題」自体は書籍の一部で、具体的な検証過程については省略されているところも多いため、その中で言及されている先行論文も参照し、より適切な文体比較の方法について理解していく必要もある。

できれば、その方法を用いて太宰治以外の小説家たちの性別に基づく文体の書き分け（書き分けられていない、ということも含めて）の実際を明らかにしていきたいとも考えているが、その作業はまだ端緒についたばかりである。

注

- (1) 「女の決闘」『月刊文章』1940年1～6月号。引用は『太宰治全集4』（筑摩書房、1998年）による。198-199頁。『太宰治全集』は引用に際して旧かなづかいを現代かなづかいにあらためた。（以下同じ）
- (2) 「女生徒」『文学界』1939年4月号。引用は『太宰治全集3』（筑摩書房、1998年）による。170-171頁。
- (3) 津島美智子『回想の太宰治』（人文書院、1978年）。
- (4) 青森県立図書館・青森県近代文学館編集『資料集第一輯有明淑の日記』（青森県文学協会、2000年）。
- (5) 同前。32頁。送りがなの誤り、取り消し線や [] による補足は原文による。
- (6) 大塚英志『文学国語入門』（星海社新書、2020年）。28頁。
- (7) 同前。4頁
- (8) 文部科学省 https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf
- (9) 『文学国語入門』（前出）。4頁。
- (10) 同前。6-7頁
- (11) 「燈籠」『若草』1937（昭和12）年10月号。引用は『太宰治全集3』（前出）による。86-87頁。
- (12) 同前。90-91頁。
- (13) 以下の句読点や品詞の数については、国立国語研究所がインターネットで公開している解析ツール「Web茶まめ」を使用した。<https://chamame.ninjal.ac.jp/> 辞書は「近現代口語小説」を選択した。
- (14) 志村有弘・渡部芳紀編『太宰治大事典』勉誠出版、2005年。「女性独白体」174-175頁、項目執筆は齋藤明美。

- (15) 太宰治『女生徒』角川文庫、2009年。
- (16) 「葉桜と魔笛」『若草』1939年6月号、引用は『太宰治全集3』（前出）による。214頁。
- (17) 同前。221頁。
- (18) 「駆込み訴え」『中央公論』1940年2月号、引用は『太宰治全集4』（前出）による。228-229頁。
- (19) テキストアナリティクス7 金明哲・中村靖子編著『文学と言語コーパスのマイニング』（岩波書店、2021年）第5章。